

零式写真芸術論

THEORY OF ZERO-HORIZON PHOTOGRAPHIC ART

NAOKI KIMURA_木村尚樹

目次

プロローグ

零の地平 — 世界が成立する以前の構造について …… 4

序章

世界の沈黙と微光 — Zero-horizon の再定義 …… 7

第一部 零式の構造(世界の側) …… 14

第一章 零式四相モデル — 世界の生成プロセス …… 14

第二章 オートポイエーシスと写真行為 …… 44

第三章 量子論モデルとしての写真 …… 53

第二部 閾値と主体 …… 75

第四章 世界の徴候と時間密度 …… 75

第五章 proto-qualia — 前意識的質と世界 …… 84

第三部 痕跡としての写真(生成現象) …… 94

第六章 写真とは何か — 世界の応答の痕跡 …… 94

第四部 観者と未来(生成美学) …… 106

第七章 零式写真芸術の未来 — 新しい美学的地形の構築 …… 106

補章

零式から写道へ — 行法としての主体の構え …… 117

終章

零式写真芸術の総括 — 世界・主体・観者のあいだに生じる「一回性の生成連鎖」
… 128

エピローグ — 還零のかすかな輪郭 ……143

付録 A 構造理論補遺 …… 144

零式外層構造と理論的再記述

— 判定理論と構造理論の分離 —

- A-I 付録の位置づけ
- A-II 構造一次相 (Primary Structural Aspects)
- A-III 構造複合相 (Composite Structural Aspects)
- A-IV 構造時間相 (Structural Time-Aspects)
- A-V proto-qualia
- A-VI 外層統合モデル
- A-VII 付録 A 総括
- A-VIII 理論的帰結と使用上の注意

付録 B 零式判定プロトコル概要 …… 178

— 写道への入口を含む運用補遺 —

- B-I 付録 B の位置づけ
- B-II 判定プロトコルの基本構成
- B-III 判定の実際
 - 写真作品における最小手順モデル —
- B-IV 誤用・誤読を避けるための注意点
- B-V 写道への入口
 - 判定が終わった地点で、何が残るのか —

付録 C | 成立の配置 …… 195

— 感覚と条件の違いについて

- 第 I 節 | 感覚の先行する領域
- 第 II 節 | 配置としての成立
- 第 III 節 | 条件は量ではなく状態として働く
- 第 IV 節 | 時間が配置を束ねる位相
- 第 V 節 | 相位は判断ではなく位置である
- 第 VI 節 | 副相は現れではなく残り方である
- 第 VII 節 | 相位と副相の交差
- 終節 | 付録 C の回収と写道への橋渡し

Bibliography …… 205

プロローグ：零の地平 — 世界が成立する以前の構造について

写真行為をめぐる議論はしばしば、被写体の理解、作者の意図、鑑賞者の経験といった主体的枠組みを基点として構築されてきた。これらの視点は、写真現象の一端を説明するために有効である。しかし、写真が成立するよりはるか以前、主体や対象が形を持つ以前の**世界そのものの構造**については、ほとんど検討が行われてこなかった。

本書で扱う **零式 (Zero-horizon)** は、まさにこの「写真行為の前段に位置する生成構造」を記述しようとする試みである。

ここでいう **零 (zero)** は、欠如や静止を意味するものではない。世界がいまだ意味・形態・対象性を獲得していない段階にありながら、すでに一定の潜勢を含み、現象の発生を可能にする基底構造として理解される。すなわち零とは、**未分化の均衡場 (undifferentiated equilibrium field)** であり、存在／非存在、内／外、主体／客体といった諸区別の成立に先行する層である。

零の地平 (Zero-horizon) とは、この未分化の均衡場が特有の構造を帯び、世界の諸現象が立ち上がりうる条件として働く地点を指す。そこでは主体の知覚も対象の輪郭も存在しない。しかし、完全な無ではない。

むしろ

「世界が世界として現れうるための前相的構造」

が静かに持続している。

本書が零式を構築する理由は明確である。

この前相的構造は、写真現象の理解において決定的に重要であるにもかかわらず、既存の写真理論、美術批評、哲学のいずれにおいても体系的に扱われてこなかったからである。

西洋哲学、とりわけ現象学は「現れの構造」を扱い、

日本思想においては「間(ma)」や「空(kū)」が

生成の条件として重視されてきた。

しかしこれらの議論の多くは、

すでに主体や経験を前提とした

“現象の段階に入ってから”

に焦点を置いている。

零式は、それよりもさらに一段階前に位置する。

主体の成立、経験の成立、対象の成立、

それらすべてに先行する層を扱う。

そして写真は、

この前相構造が主体側の内部変容と交差することで

初めて成立する

「一回的な生成現象」

として定義し直される。

零式(Zero-horizon)は、

世界の立ち上がりを前相的構造として捉え、

そこから写真の成立条件を再構築するための理論である。

このプロローグを通して、
読者は以下の問いを共有することになるだろう。

—世界は、どのようにして“現れうる”のか。
そして写真は、その現れのどの位置で成立するのか。

本書は、その問いに対するひとつの構造的な回答として書かれる。

序章 世界の沈黙と微光-Zero-horizon の再定義

零の地平 — 世界が成立する以前の構造をどのように記述するか

写真について語る多くの理論は、
主体(写真家)がどのように世界を見るか、
装置がどのように像を生成するか、
あるいは写真が社会的にどのような役割を担うか、
といった“成立後の現象”を基点に構築されている。

しかし、写真が成立する以前—
世界がまだ対象にも意味にも経験にも分岐していない段階—
その **前相の構造** にこそ、
写真現象を根源的に理解する鍵があるのではないか。

この問いを出発点として、
本書は **零式(Zero-horizon)** という理論を提示する。

■1. 零の地平: 主体化・意味化の前段階としての“未分化場”

ここで言う「零」は、欠如や無ではなく、
対象・関係・意味がまだ分化していない
潜勢的な均衡場 を指す。

世界はすでに存在しているが、
「何かを見る主体」も
「何かとして現れる対象」も
まだ確定していない。

この領域は、
現象学における“与えられの前段階”と
一定の親和性を持つものの、
主体の志向性を前提としない点で
より原初的である。

また、日本思想における「間(ま)」や「空(くう)」とも
構造的隣接性を持つが、
それらがすでに関係性・空間性を前提とするのに対し、
零の地平は **関係性が成立する以前** の層として位置づけられる。

本論は、主体以前の前相構造を記述するものである。
それがどのように体感として現れるかという閾値については、
本論の射程には含めない。
これは理論の欠陥ではなく、
適用条件を明確にするための前提である。

■ 1-b. 限界芸術と零の地平——制度以前の生成構造と世界以前の生成構造

芸術が成立する以前の地点をめぐる議論は、
20世紀後半、鶴見俊輔の提示した **限界芸術(Marginal Art)** において
ひとつの転回点を迎えた¹。
限界芸術とは、芸術制度に回収される以前の、
素朴で、評価制度から自由で、
“表現の起源”と呼べる地帯を指す。

しかし、本書が扱う **零式(Zero-horizon)** が照らす領域は、
この制度以前よりもさらに深い、

世界そのものが成立する以前の**前相構造**に属する。

両者は同じ地平に位置するものではないが、
“成立以前へのまなざし”という点において、
静かな構造的連続性を帯びている。

限界芸術が明らかにしたのは、

芸術制度の外側に位置する**制度前相**(pre-institutional layer)の存在である。

一方、零式が扱うのは、

主体・意味・表象が成立する前の**存在前相**(pre-phenomenal layer)である²。

階層は異なるが、どちらも

“成立後の枠組みを前提にしない”という
根源方向への姿勢を共有している。

この関係を誤解してはならない。

零式は限界芸術の理論的延長ではなく、

またその応用でもない。

むしろその射程は、

制度の成立以前という社会的レイヤーをはるかに超えて、

世界が世界として立ち上がる以前の

生成の構造そのものを扱う。

もし両者に響き合いがあるとすれば、

それは“制度以前をめぐる問いを、存在以前へとさらに押し広げる”

という意味においてである。

限界芸術が示した“制度を離れた表現の起源”は、

零式において、

“世界の生成そのものの起源”へと昇華される。

制度から離れるのではなく、

制度が成立する基層そのものへと降りてゆく運動である。

この視点は、
本書が扱う 四相モデル(元零・零振・零応・還零) を理解する上でも重要である。
写真行為が世界に対して後成的に働くのではなく、
世界の前相構造がすでに
“写真が成立しうる条件” を準備しているという視点は、
限界芸術の“制度外という地帯”を、
存在論的地帯(ontological region) として再定義する試みでもある³。

限界芸術を本書において中心理論として扱う意図はない。

しかし、
“成立以前へと遡行するまなざし” という一点においてのみ、
それは零式のより深い層を示す指標として
静かに参照される価値を持つ。

《脚注》

1. 鶴見俊輔『現代の限界芸術論』。芸術制度の周縁における“素朴な表現”を美学的に再定位した試みとして重要。
2. 零式における「前相構造」は、主体・対象・意味が成立する以前の生成論的地帯を示し、社会制度の有無とは直接関係しない。
3. 限界芸術は“制度以前”であり、零式は“存在以前”である。この階層差を明確に保持したまま、両者の“遡行的姿勢”のみを接続させるのが昇華ロジックの本質である。

■ 2. 既存の写真理論が触れてこなかった“前相構造”

バルト、フルッサー、ソントグなどは、
写真の構造を主体の経験、装置のプログラム、社会的影響など
後成的(ポスト・ファクト)の次元から分析した。

しかし、

世界が写真として現れる以前の状態を説明する理論は存在しない。

「なぜ世界は、写真という形式で一度きりの像を許容するのか？」

この問いに答えようとする試みが、零式の立脚点である。

■ 3. 零式四相 — 世界の発生前構造を記述する最小単位

零式では、

世界の前相領域を四つの構造として記述する。

- **元零 (Proto-zero)**
未分化の均衡場。存在・非存在の境界以前。
- **零振 (Zero-tremor)**
均衡がわずかに偏位する段階。方向性も意味ももたない。
- **零応 (Zero-response)**
世界側の最小応答。主体はまだ存在しない。
- **還零 (Zero-return)**
偏位と応答が中性化され、均衡へ回帰する。

これらは「世界の生成工程」を粒度の高い構造単位として捉えるための**前現象的モデル**である。

写真行為はこの四相を前提とした“応答”として生じるが、本書の序章の段階では、**主体的行為ではなく世界側の構造のみ**を扱う。

※ 写真家の構え・行法としての「写道 (Shadō)」については、本書の末尾にて**別体系 (主体側)**として独立に扱う。序章では、零式という世界側の構造のみに限定する。

■ 4. オートポイエーシス／量子論の参照(概論レイヤー)

本書は、零式四相を理解する補助として
次の概念を“概論レイヤー”の範囲で参照する。

- **自己生成系(オートポイエーシス)**
外界は“情報”としてではなく“攪乱”として作用する。
零式の偏位・応答構造と親和性を持つ。
- **量子論の構造モデル**
“可能態 → 閾値 → 現実化”というモデルが
零式の生成プロセスの比喻として有効。

ただし、本稿はこれらを深掘りするのではなく、
零式という前相構造の説明に必要な最低限だけを扱う。

■ 5. 本書の目的

本書が目指すのは次の点である：

1. 写真成立以前の世界構造を「零の地平」として記述すること
2. 零式四相を、前相領域の最小構造モデルとして提示すること
3. 主体・装置・意味に依存しない生成モデルを確立すること
4. 写真を、世界の応答構造の痕跡として再定義するための基盤を示すこと

これにより、

写真は主体の表現でも、装置の産物でもなく、
世界構造との一回的交差として捉え直される。

序章は以上である。

続く各章では、この前相構造を四相に分解し、
世界の生成のプロセスそのものを論理的に展開する。